

タイトル

「救われた心臓」

川嶋かつみ

ログライン

心臓移植で生かされているというプレッシャーに、身動き取れない健二（28）が、一度は人の役に立ちたいと言うケンカファイターと、自分を慕ってくれる甥っ子の光（小学3）が自分と同様、心臓移植手術をしなければならなかったことを知る。

登場人物

速水健二 (28・25・12) . . . フリーター

武 (35・32) . . . 健二の兄 (生命保険会、課長)

夏実 (30) . . . 健二の姉 (アパレル・バイヤー)

芳朗 (60・44) . . . 健二の父 (信用金庫、常務理事)

待子 (58) . . . 健二の姉 (主婦)

光 (小学3年) . . . 武の長男

武の妻

モヒカン頭の巨漢 (30)

場末の年増のママ

子供A . . . 小学6年 (いじめられてる子)

子供B . . . 小学6年

子供C . . . 小学6年

子供D . . . 小学6年

中学生A

中学生B

中学生他

担当医

看護師

○遊歩道がある市民公園（初夏・午前）

ジョギングの健二（28）、汗グツシヨリで、息絶え絶え。突然、立ち止まり、胸を押さえ付ける。落ち着くと、再び、走り出す。

○健二のアパート・中

シャワーを浴びている健二、鏡を覗く。逞しい体に似合わず、目がげっそりと落ち込んでいる。

健二 「ウツ……」

また、胸を押える。手術の傷跡が見える。屈み込み、治まると、何やら探し回る。紐である。

風呂のノブに巻き付け、自殺を図る。
健二「グウウウウ……（朦朧）」

○回想

講演会で愛想を振舞う父、速水芳朗（60）が、

芳朗 「頼むよ、健二。何とかならないか」

× × × ×

ご飯をよそう母、待子（58）が、
待子 「他のことはいいの。体だけは大事になさい」

× × × ×

商品の服をチェックしながら姉、夏実（30）が、

夏実 「私の言う通りやってれば大丈夫なの。健二、判った」

× × × ×

兄、武（35）は健二に背を向け、
武 「だから、ダメなんだ。いいから帰ってくれ」

とそれぞれ健二に告げる。

○元の健二

ピクリとも動かない。

が、急に両手で紐を掴み解く。

健二 「ウグツ……ハァーハァー、オエー」

瞳孔が見開いている。

足元の洗濯カゴを蹴飛ばす。

○駅前繁華街（例、吉祥寺等）裏路地・夜

行く健二。

○場末のバー

カウンターと3つのテーブル席は、煙と酒に包まれ、男と女が絡み合っている。

年増のママが囁く。

ママ 「ねえ、一度、抱かして」

健二 「やめといたほうがいい」

と、奥のドアに向かう。

携帯が鳴る。見る、父からだ。

切って、入って行く。

○博奕部屋

ポーカーを楽しんでいる輩。

健二、見廻す。

叫び声が突き刺す。

「逃げ出したと思ったじゃねえか」

振り返る健二。

客がスーッと壁に吸い寄せられていく。モヒカン頭の巨漢（30）が立っている。

健二 「びっくりさせないでくれ。心臓に悪
いんだ」

巨漢 「オメエが、そんなこと言うかわねえ」

健二 「じゃ、始めようか」

巨漢 「ちよつと、待ってくれ。万が一の為にさ。聞いてくれ」

健二 「なんだよ」

巨漢 「実はな、俺の体はさ、とっても貴重なんだよね」

健二 「だから」

巨漢 「丁寧に扱って欲しいんだ」

健二 「……何、たわけたこと言ってるんだよ」
健二、先制攻撃。巨漢を難なく倒し、殴る、蹴るのやりたい放題。

しかし、巨漢、ムックと立ち上がり、反撃。

健二、胸に膝蹴りが食い込み、屈伏し、目が彷徨う。

× × ×

回想 ベッドの健二（小6年）が、

「いいの、もう、ぼく助けしないで。イ

ジメられるの、イヤなんだ……このままでいいの、助けないで」

芳朗（44） 「何、言ってるんだ、健二」

平坦だった心電図が波打つ、ピッピッピッピッ……。

健二 「（目が覚め）ここはどこ？」

芳朗 「助かったんだよ」

健二 「（虚ろな目）」

× × ×

巨漢、足で健二の胸を踏みつけている。
健二 「アウツ（泡を吹く）」

トドメを刺そうと巨体を宙に浮かせ、プレスしようとした瞬間、体制を交わされ、地面に叩きつけられる。

健二、反撃し巨漢を追い詰め、一撃を食らわす。

仰向けに倒れる巨漢。

巨漢 「……健二よ、言ったよな、丁寧に扱ってくれよ……」

健二 「話になんねえよ」

巨漢 「だから、借りを返す。また勝負だ」

健二 「……」

巨漢 「俺さ、今のままじゃいけねえって、考え中なんだよな、健二。分かるか……」

健二 「……」

○ある一室

女、健二に股がり腰を振る。
携帯鳴る。

健二、渋々出る。

芳朗 「身体、大丈夫か……」

健二 「……（切りかける）」

芳朗 「切らないでくれ。明日、光くんの世話頼む」

健二 「何で、兄貴が頼まないんだ」

芳朗 「俺が頼んでる。行ってくれ。光も

待ってる」

健二 「……」

○武の一戸建て。（翌日・朝）

○同・中

食器洗いを手伝う光（小3）。

夏実 「そう、次、これ」

光、そのスプーンでシンクを叩く。

夏実 「コラー、ダメよ、やめなさい」

止める。

夏実 「さつき、上手に拭いてたでしょ」

また、激しく叩き始める。

夏実 「そんなことしない、ダメーッ！」

光、動き、止まる。

武、上着を羽織りながら、光を睨む。

武 「光！夏実、悪いな。せつかくの日曜」

夏実 「仕方ないでしょ」

武 「じゃ、頼むわ」

チャイム、鳴る。

× × ×

開けると、

健二 「……」

武 「何だ」

健二 「……（踵を返す）」

武 「オヤジか」

健二 「……別に」

武 「お前に用は無い」
光 駆けて来た光、健二に飛びつく。
光 「ヤッター、今日、何する？」
健二 「よう！おひさだよな！」
武、来た夏実と顔を見合わず。
夏実 「せっかくだからさ、いいんじゃない」
武 「おい、今後は……」
健二 「最後にするからさ」
武 「当たり前だ（出て行く）」
健二 「……」
光 「ねえ、ねえ、早く、外、行こうよ」
健二 「ああ、行こう」
夏実 「ラッキー、助かったわ」
健二 「言われてること、やってるだけだよ」
夏実 「もーウ……お昼、食べるんでしょ」
健二 「作れるんだ」
夏実 「見直したでしょ」
健二 「そう……かな」

○武家近辺の市民公園

ベンチで図鑑を見てる二人。
「銀河系、木星、星座」に夢中の光。
健二 「そんなに、面白いか」
光 「うん。行きたいなあ、宇宙」
健二 「そうか……（空を見上げる）」
光 「（光も見上げ乍ら）宇宙飛行士、なれると思う」
健二 「そうだな……無理だな」
光 「なんで」
健二 「いっぱい勉強しなきゃ。死ぬ程さ。できる？」
光 「うん」
健二 「（微笑む）」
サッカーボールが足元に転がってくる。
中学生、数人の一人がお辞儀し乍ら、
中学A 「すいませーん」
健二 「よう、ちよつとやらしてくんねえか」
中学A 「はー……（仲間の顔を伺い）ちよつと、だけなら」

健二 「すまん。光、サッカーやろう」

光 「やったこと、ないもん」

健二 「じゃ、しよう」

光 「……ぼく、動くの得意じゃない」

健二 「そんなじゃ、宇宙飛行士なれねえぞ」

光 「じゃ、する」

ボールを小突く、健二の後を追う光。

健二、振り返り、光にパス。

受け止めるがバランス崩し、倒れる光。

健二 「なんだ。その、屁っ放り腰は」

と、転がっていったボールを捉え、

健二 「こう、するんだ！」

と、高々と蹴り上げる。

健二 「おい、いったぞ！」

中学B 「ったく。なんだよ」

健二 「そう、言うなって。やるぞー」

楽しむ、健二、中学生、そして、光。

懸命に走る光、

その時、バツタリ、倒れる。

健二 「救急車、早く！救急車、呼べ！」

○病院・緊急救命室

チューブに繋がれた光を見つめる武。

担当医 「今日1日は様子を見ましょう」

武 「……」

○同・待合ロビー

待っている、芳朗、待子、夏実と健二。
やって来る武、健二に、

武 「光まで、殺さないでくれ」

健二 「……そんなに、酷いなんて」

武 「お前なら、判ってたはずだ」

健二 「そんなことない」

武 「（呟く）ワザとじゃないのか」

健二 「えー！」

夏実 「兄さん！」

芳朗 「おい、武！」

待子 「そんなこと言っちゃ……」

健二 「……………（武を睨んでいる）」

× × ×

回想 （3年前）

庭、裏手の物置で、

健二の上で武の妻が喘いでる。

妻 「ちゃんと、生きていけるわよ……」

胸の傷を撫で、抱きしめる。

突っ立てていた武。

慄く二人。

× × ×

睡眠薬で自死した妻。

× × ×

武 「おい、健二、聞いているのか。お前と

一緒なんだ。心臓なんだよ、心臓。移植な

んだよ。まったく！お前を見てたらさ」

健二 「サッカーしたかったんだよ。ホント

はさ。光、したいんだよ。走り回りたいん

だよ。何も、判ってねえのは、そっちだろ。

放つといてくれよ、俺のことだってさ……」

武 「……」

健二 「俺はさ、死にたいと思ってても死ねな

いんだ……これはさ、俺の命じゃねえからよ」

健二、シャツ上げ、胸の傷を曝け出す。

健二 「欲しけりゃ、あげるよ。心臓。使っ

てくれよ。頼むよ……」

武 「……」

夏実 「……」

待子 「……」

芳朗 「健二……」

そこへ、看護師来て、

看護師 「すみません、健二さんて方、いらっ

しゃいますか。坊ちゃんが呼んでるんです」

健二 「僕ですが……」

看護師に続く健二。

○ 同・病室

顔を覗かす健二。

光 「（ニツコリ）健二兄ちゃん、また、

遊んでね。僕、もっと、うまくなるからさ」

健二 「宇宙飛行士になるんだもんな」

○博奕部屋（夜）

傷跡を晒し構えてる健二。

態勢を整える巨漢。

健二、挑みかかる。

が、空を切るばかりで相手にならない。

巨漢、健二を投げ倒し、立ちはだかる。

巨漢 「俺の勝ちだな」

健二 「すっきりした顔してんじゃねえか？」

巨漢 「俺は思ったんだ。悪いことしてもよ。

最後はいいことしようと思っただ。オメエの

体見て思ったんだ…ドナーになったんだよ。

いいだろ。ワハハハハ…」

○建築現場

汗だくで鉄骨を運ぶ健二。

（終）